

今夜、君と愛に溺れる

Y u i & K a z u m a

砂原雑音

Noise Sanabara

ternity



エタニティ文庫

目次

今夜、君と愛に溺れる

5

書き下ろし番外編
兄、襲来

319

今夜、君と愛に溺れる

プロローグ

男と女は、求めるものが違うのだという。

男は結果を、女はコミュニケーションを求めるのだと、昔テレビか何かで聞いたことがある。

男女の価値観のズレや、性別ゆえの感じ方、捉え方の違い。

それに気づかず口論すれば、当然答えが出ないままお互いにただ疲れるだけ。

つまり、簡潔に言えばこういうこと。

男は女心がわからない。

女も男心がわからない。

結局、互いに相手の言いたいことは理解できても、共感できないから納得もできないのだ。

カチカチカチ、と壁掛け時計の秒針が時を刻む。今まで、この男と一緒にいてこれ程

その音が耳に障さぶったことがあっただろうか。沈黙、無言という空間に縁がなかった、二人でいる時は。

何かを言わなければ、と気持ちばかりが焦ってくる。それは彼も同じようで、唇が躊躇ためらいがちに開いては閉じるを繰り返す。

私の指先を掴む彼の手に、きゅっと力が込められて数秒後……

「
」
これまで散々彼に悪態をつかれてきたけど、この時のたった一言程胸に響いた言葉はなかった。

1 イベントの重要度

先日、誕生日を迎えた。

彼氏もおらず、ましてや平日ということもあって、友人や親からメッセージが届いた程度であっさり一日が終わった。

広瀬結ひろせゆい、二十七歳。

大学を出てすぐ、大手洋菓子メーカーに就職し、企画営業部に身を置き五年が経つ。

最初の一年は勉強ばかりだったが、二年目に初めて自分の企画が商品化した時は、とてもない達成感があった。初めて試作品ができあがった時、パッケージの完成品が届いた時、自分の企画した商品を店頭で見つけた時——全て写真に収めて今もスマホのアルバムに残してある。

その時の記憶を支えに、今まで頭に浮かぶイメージを次々と企画書にまとめてきた。もちろん、その全部が商品化されたわけではないけれど、企画の仕事が楽しくて仕方なかった。

しかし近頃、調子は低迷気味だ。

いくつ企画を出しても中々通してもらえない。それどころか会議にすら上げてもらえずポツになったものもある。

今までも、決して特別飛びぬけた結果を出していたわけではないのだけれど、こうも上手くいかないことが続くと、さすがに気力も萎えてくる。

この不調の原因に思い当たる節はあった。

昨年秋にあった人員入れ替えをきっかけに、オフィス内で行った席替え。

仕事が上手くいかない理由を誰かのせいにするつもりはないけれど、私の調子がおかしくなったのは、明らかに彼が右隣に座るようになってからだ。

同期入社の人柄和真。

私は以前から、彼のが好きじゃない。

すらりと背が高く、手足の長いモデル体型。整った顔立ちに、短く整えられた艶のある黒髪。

少し長めの前髪から覗く涼しげな目元そのままに、性格も実にクールな奴だった。

いつの間にか同期の誰よりも商品化に貢献している。昨年、彼が企画したバラエティ商品はここ数年で一番のヒット作となった。そんな誰もが羨む実績を、涼しい顔をして着々と積んでいる。

そんな男が隣にいれば、どうしたって劣等感が湧いてくるというものだ。

どんな仕事の仕方をしてるんだろう、と気になって気になって仕方がない。気がつけば、すっかり調子を狂わされてしまった。

そしてもう一つ、来栖を好きになれない理由が仕事とは別にあった。

見目が良く仕事もデキる、そんな男がモテないはずはない。

だが彼は、来るもの拒まず去るもの追わずで彼女が定着しない、というクールを笠に着たクズ男だったのだ。

「どうして仕事入れちやうの!?!」

定時間際、提出書類を総務に届けてオフィスに戻る途中のことだった。

私が廊下を歩いていると、ミーティングルームから責めるような女の声が聞こえてくる。あまり聞き覚えのない声からして、どうやら企画営業の人間ではなさそうだ。

「入れたんじゃないくて、入っちゃったものは仕方ないだろ」
相手の声は、来栖のものだった。

冷たいくらいに落ち着き払った声は、感情的になってる彼女にとって余計に腹の立つものだったのだろう。一瞬の沈黙の後、聞こえてきた彼女の声は少し震えていた。

「入っちゃったって……誕生日なのに！ 前からずっと約束してたよね？ 夜くらい空けられないの？」

「……夜は打ち合わせの後そのまま接待になる。忘れてたのは悪かった」

あああ。忘れてたって言っちゃったよ。

「忘れてたって……付き合ってから最初の誕生日だよ？ 何度も言ったのに酷くない？ ……仕事が忙しいのはわかるけど、それって私が言ってること全然頭に入ってたかったってことじゃないの？」

当然彼女は納得がいかないらしく、早口で捲し立てる。だけど来栖は、それっきり沈黙してしまった。

いやいや、そこで黙っちゃダメでしょ。

成り行きが気になってついドアの前で立ち止まり、立ち去れなくなってしまった。

誕生日だからって、無条件に自分の約束が最優先されると思うのは間違っている。けれど、付き合ってから初めての誕生日なら、確かになんとかしたいと思う気持ちもわかった。それに、あれだよ。致し方なく仕事が入ったというならまだしも、「忘れてた」っていうのはまずいんじゃないですか、来栖くん。

ハラハラしながら、ドアの前で聞き耳を立ててしまう。沈黙を続ける来栖に、痺れをさらしたらしい彼女の言葉が続く。

「接待って何時に終わるの？」

「わからない」

「わからないって、ちょっとは予測つくんじゃない？ 私待ってるし」

「いつになるかわからないの？ そんな無駄な時間使うなよ」

「無駄って……酷い。ちょっとでも一緒にいたいって思うから言ってるのに」

「……いちいち悪い意味に受け取るなよ」

「じゃあどうい意味よ！」

ついに彼女の声が、金切り声に変わった。

私はおろおろと周囲を見渡す。時刻はすでに定時を過ぎていて、通路に人は少ないけれど、まったくいないわけじゃない。

さすがにミーティングルームで痴話げんかをしてる、なんて知られたらまずいでしょ。

早く彼女を宥めるのだ！　と言ってやりたいけど、口を出すわけにもいかないこの状況。

そして、ミーティングルームから聞こえてきたのは、この上なく重く長い溜息と――
「……めんどくさ」

ブリザード吹き荒れる一言だった。

いや来栖！　めんどくさいのはわかるけど、女はめんどくさい生き物なんだよ！
たとえ思っても言っちゃダメな一言に、彼女の返事は言葉ではなかった。

パシーン！　と気持ちいい音が聞こえたかと思つたら、カツカツと荒々しいヒールの音がする。

あ、やばい！　そう思つた時には、目の前のドアが勢いよく開き、私の鼻先を掠めた。

「うわっ！」

「きゃっっ！」

向こうも驚いたのだろう。涙を浮かべた大きな瞳を、更に大きく見開いている。

なんと。総務の花、戸川菜穂ちゃんだ。

めちゃくちゃ可愛くて愛想がいいって聞いていたけど、すれ違いざまキッと強く睨まれた。

「サイテー！」という捨てゼリフは私と来栖、どっちに向けたものだろう。

私は偶然居合わせただけで、聞く気はなかったのよ！

そう弁解したかったが、彼女の背中はあつと間に角を曲がって見えなくなる。おろおろしながら彼女の消えた廊下の角を見つめていると、えらくドスの利いた低い声で名前を呼ばれた。

「広瀬……盗み聞きか？」

「違うわよ、通りかかっただけ！」

あんたまで失礼な！

確かに部屋の前で足は止まってたけど、わざとじゃない。だってあれは止まるでしょ。
「それより来栖くん、早く追いかけたほうがいいよ！」

来栖の顔を見れば、右頬に見事に赤く紅葉が咲いている。戸川菜穂はどうやら左利きのようだ。

「こういうのは、すぐに解決したほうがいいって」

今ならまだ追いつけるはずだ。だから早く、と来栖を急かすのだが、当の本人はひどく冷めた表情で床を見つめたまま動こうとしない。

「いや。いい、もう」

「は？　いいわけないでしょ、彼女でしょ!？」

「彼女ならなんでも最優先なのかよ？　もういいって」

いや、別にそんなことは思わないが。ただ彼氏なら、やつぱり放っておくのはまずいだらう。

「あんたの言い分もわかるけど、女つてのは追っかけてきて欲しいものでしょ」

後を追いかけてフォローして、ちゃんと話し合うべきだ。だが来栖は、その場にしゃがみ込んで背中を丸めてしまった。

いようなれば、吹き荒れていたブリザードが、ひゆるると萎んでいくイメージだ。

「は？ え、ちよつと……どうしたのよ」

来るもの拒まず去るもの追わず。冷やかな態度で彼女が定着しない……そんな「噂」を持つクールなクズ男。目の前のこれが、その来栖和真か？

「……疲れた」

一体何があった、来栖和真。

* * *

たとえば来栖が噂どおりの男なら、私も「サイテー」と言つてあの場を離れていただらう。

いや、泣いて走り去った彼女を追いかける気がない時点でサイテーであることに変わ

りないのだが、全身で疲労感を表す男を放つてはおけなかった。

そんなわけで私たちは今、赤ちようちんがぶら下がるオッサン居酒屋のカウンターに肩を並べて座っている。面倒くさがる来栖を無理矢理引つ張つて来たので、彼の横顔は見事なまでに仏頂面だ。

そういえば、来栖とはずっと同じ部署にいるけれど、こうしてプライベートで飲むのは初めてかもしれない。今までは、せいぜい忘年会で顔を見る程度だ。

「……こんなところ菜穂に見られたらマジで困るんだけど。あいつ、すげえ嫉妬深いんだよ」

「大丈夫大丈夫、緩衝材呼んどいたから」

「緩衝材？」

私だつて来栖と二人で飲むなんて冗談じゃないわけで、飲み友の同期をもう一人召喚した。訝しげな顔をする来栖を無視して、カウンター越しに瓶ビールを注文する。

「上手くない時は飲んで愚痴るのが一番でしょーが。最初の一本は奢つてやるわよ」

「お前、絶対面白がつてるだろ」

「私だつてそんな暇じゃないわよ！」

頬が引き攣つたのは、多少の凶星もあつたからだ。

だってあの、涼しい顔で次々企画を実現しちゃう来栖和真をだよ？ こんな風に弄れ

る日がくるなど思わないじゃあないですか。
むすつとしたまま不機嫌さを隠さない来栖に、どうにか口を開かせようとビールを注ぐ。最初は話したがらなかつた来栖だが、ビールが進むうちにぼつぼつと愚痴を零し始める。

結果、無口キャラだったイメージが見事に崩れた。

「そうは言うけど、毎晩毎晩、電話なんてできないだろ。今日は何食ったとか誰がどうしたとか、そんな話ばっかしてどうなんだよ」

「大切なのは話の内容じゃなくて、声を聞いたり話したりすることなんだって！ 女はそういうもんなの！ 別に毎晩小難しい話しろって言ってんじやないんだから、電話くらいできるでしょうが！」

「できるできないの問題じゃねーわ、必要か必要ないかの話だろ！」

「だから、話をするこゝと自体が必要なんだって言ってんでしょ！」

中々来ない緩衝材かんしょうざい。オッサン居酒屋のカウンターで、いつしか二人はヒートアップしていた。

私たちの言い合いのきつかけは、来栖のとある発言から。曰く、来栖と彼女は現在付き合つて三か月。最初の頃に比べて段々と増えてきた彼女の電話に、ほとほと疲れていくらしい。

まあ、男というのは連絡不精ぶせうなものだというし、電話も用件のみというタイプが多いのかもしれないが。もしかすると来栖は、それが少々極端なのかもしれない。

会社であれ程しつこく食い下がっていた彼女は、もしかしたら来栖のそういうところに普段から寂しさを感じているのではないだろうか。

「こつちだつて仕事して帰つて来て、いつでも愛想いい声ばかり出してられないだろ」
うんざりとした重い溜息がカウンターに落ちた。

来栖の言い分もわからないでもないが、それでもこれまでの彼女が本当に最長三か月なら、明らかにこの男に落ち度があるように思えてならない。

なんだろう。決して極端な我儘わがままを言つてるようには思えないのに、何かこう、納得がいかない気がする。

「でもさ。いい大人なんだから、感情的になつてしようもない別れ方する前に、ちゃんと話しなよ」

「わかつてる。そのうち向こうから連絡してくる」

「それ！ そういうのよ！」

わかつた、ようやく何に納得がいかないか掴めてきた気がする。

来栖を責めていた彼女は、確かに少々めんどくさい感じもあつたが、一緒にいたいっていうのが第三者の私にも伝わってきた。

「普通さ、彼女を怒らせたらもうちょい焦るでしょうよ。なににあんたが涼しい顔ばかりしてるから、彼女もヒートアップすんのよ！」

クール過ぎるのだこいつは、と結論付けようとしたところで、背後からボンッと背中を叩かれた。

「ヒートアップしてんのはお前だろ。つうか珍しい組み合わせだな、驚いたわ」

すっかり忘れていた緩衝材がようやく到着した。来栖が後ろを振り向いて、驚いた顔をする。

「緩衝材って、おのだから」

「そ。うちらよく一緒に飲むから」

商品開発部の小野田公一。大学ではアメフトをやっていたという彼は、がっしりとした大きな身体をしているが、にかつと笑った顔はちよつと童顔。性格も穏やかなこの同期は、私の今一番気心の知れた飲み友達だ。

「遅いよ小野田」

来栖とは反対側の私の隣に座った小野田は、カウンターの中の店員に「ビール一つ」と声をかけてから、こちらを向く。

「悪い。電話中だったからメールに気づくのが遅れたんだよ」

「あ。苑子ちゃん？もしかして今日会う約束だった？ だったらそっち優先でよかつたのに」

「たのに」

「いや。彼女明日早いから、今日は会えないつつって。電話してたら長くなっちゃって」

小野田には、現在溺愛中の彼女がいる。でれつと鼻の下を伸ばした顔に、これだよと思つた。ぐるん、と来栖を振り向くと、小野田の顔を指差した。

「これだよ！ あんたに足りないのコレ！」

「来た早々コレ扱いだよ、俺……」

「……俺にこの顔をしろと」

私の意図するところをすぐに理解したらしいが、よっぽど受け入れがたいのか来栖の顔が複雑そうに歪んでいる。

「気持ちの問題！ そういう温度差って結構伝わるんだって。だから彼女も束縛気味になるんじゃないの？ あんたから会いたいとか言ってる？ 電話したいとか？ 言わないでしょ、絶対。傍から見ても、温度差感じるもん。彼女はもつと感じてるはずだよ、きつと」

「……温度差ねえ」

ぼそつと呟きつつ、何か思い当たる節でもあったのだろう。来栖は俯いて少し考え込むように、言葉を送り切らせる。そのタイミングで、カウンターのの上に置いてあった彼のスマホが、断続的に振動を始めた。つい目を向ければ、画面には「菜穂」と表示され

ている。

「ちゃんと謝ったほうがいいよ。あのままはよくない」

「わかってるよ」

口うるさい奴だと言いたげな視線が飛んできたが、さっきみたいな冷めた投げやり感はない。来栖は席を立ちながら親指を滑らせスマホを耳に当てた。

「……菜穂？」

意識して、なのかもしれないけど、ミーティングルームで聞いた声とは比べものにならない柔らかい声でほっとする。

「いや、俺も悪かった。ちよっと待って」

席を離れて店の外へ出て行く横顔に、一瞬優しい微笑を見た。

「……なんだ。あんな顔もできるんじゃない」

「来栖は、確かにべたべたするタイプじゃないけどな。噂みたいにな、次から次へ女をとつかえひつかえしてるわけでもないんだぞ」

「それはなんとなくわかったけど……あんなに喋る男だとは思わなかった」

まあ、溜まっていた鬱憤を吐き出してただけかもしれないけれど。

まともに来栖と話したのは、これが初めてだった。何しろ彼は、仕事中は無口でにこりともしない。これまで、挨拶か業務上の連絡事項くらいでしか言葉を交わしたことが

なかった。

「男同士で飲む時は結構喋る奴だよ。けどあんなにヒートアップしてるのは初めて見たな」

「そうなの？」

小野田から見ても珍しい姿だったらしい。

「つい色々口出ししちゃったけど。あの感じだったら何もなくてもすぐ仲直りしたかもね」

「いいんじゃないね？ お前に吐き出してすっきりしたおかげかもしれないし」

「そうかな」

「広瀬は結構、世話焼きだよな」

「そんなんじゃないよ。興味本位でつい」

クールな男の別の顔が見られると思つて、ぐいぐい押し過ぎた。来栖には、きつといい迷惑だっただろう。

「無関心よりずっといいさ。俺は、広瀬のそういうところいいと思うよ」

小野田はこんな言葉を、飲み友達の私にもさらっと言ってくれる。天然か癒し系か知らないが、相手の欲しがる言葉を理解して自然と口にできる小野田はいい男だろう。

比べて来栖は、あんなに女慣れしてそうな外見なのに、案外小野田よりずっと不器用

な男なのかもしれないと思った。

三人で飲んだ数日後、来栖は彼女と無事に仲直りしたらしい。私のお節介もちょっとは効果があったのかな。案外素直なところもあるのだと思うと、来栖のクールなイメージが若干崩れた。

といっても、絶対零度から氷点下くらいの違いだけど。なにせオフィスでは、相変わらず口数が少ないので。

朝、オフィスに着いた私は、すでに隣に座っていた来栖に声をかけた。

「おはよ」

「おう」

戻ってきたのは、少しだけ砕けた挨拶。そのおかげか、デスクの居心地が前程悪くないと思えるようになっていた。

パソコン画面を睨みながら、かち、かち、とマウスをクリックする。仕事に集中できるようになったからといって、そうそう仕事は上手く運ばないものらしい。私は次の商品企画に向けて、朝から延々と他社商品や去年の季節ものなどの画像を探し続けていた。はー……と、思わず長い溜息を零した時、私と来栖の間で驚きの変化が起きる。

「……何悩んでんの。次の企画？」

ぼそつと静かな声が聞こえて隣を見た。来栖は自分のパソコン画面をまっすぐ見つめたままだが、今の言葉は私に向けて発していたはず……だよな？

「え……うん。クリームブッセの期間限定のテイストなんだけど。クリームの味だけじゃなく、ブッセ生地の色も変えたいと思うんだけど、素材で迷ってる」

まさか来栖から声をかけられるとは思ってなくて、私は思い切り目を見開いてしまった。彼は相変わらずパソコンに向かったまま、ちらつと視線だけを向けてくる。

「季節もの？」

「じゃなくてもいいの。ただ、限定感は欲しくて」

「ああ……難しいよな。流行りの味はどこもバンバン出してくるし」

「そうなのよ、人気の味ってことは珍しくないってことだし……それをそのままやっただって、結局は二番煎じでしょ？」

再びパソコン画面に視線を戻す。こめかみに指を当てながら再び思考をクリームブッセに集中させていると、再び来栖のぼそぼそ声が聞こえた。

「気分転換でもしてみれば？ 画像やら文章やら情報ばかり見ても、ダメな時は何も出てこないぞ」

「……わかっているけど、そんなしょっちゅう食べ歩きなんて行けないしさ」

「別に食べ歩きしろとは言ってねえけど」

即座に突っ込まれてしまった。

「私の気分転換は食べ歩きなの！ いいでしょ別に」

そんなの来栖の知ったこっちゃないだろうけどさ。

「そっちは何してんの？」

「新商品のパッケージとか？」

相談に乗る、という程でもない。ただお互いの仕事の進捗状況を話し合うような、仕事仲間なら普通にありそうな会話。だけど、来栖とは初めてのことだった。

そして、翌日。今朝は私のほうが来栖より先にオフィスに着いた。パソコンを起動させていると、来栖が出勤してくる。

「おはよ……え、何これ」

来栖から、無言でA4サイズくらいの紙の手提げ袋を渡される。中を見ると、個包装のお菓子がどっさり入っていた。

「限定ものの味とか季節ものとか、今出回ってるの集めてきた。食べ歩かなくても気分転換はできる」

「え」

「それに、パソコンで画像見ると、実際に目で見ると全然印象が違うんだろ」
相変わらずにこりともしない。言うだけ言うと、来栖はそのまま自分のパソコンを立

ち上げ、さっさと仕事を始めてしまった。

私は再び袋の中身に視線を落としてから、もう一度来栖の横顔を見る。

え。これってつまり、昨日私が悩んでたクリームブッセの企画のために、わざわざ集めてきてくれたってこと？

「あ、ありがとう。助かる」

「おう。俺はスランプの時、いつもそうしてるから」

そういうえば、私も最初、ホントに何にもわからなかった頃はよくそうしていたっけ。

手提げ袋の中から、一個一個お菓子を取り出してデスクの上に並べていく。そうするうちに、何だか擦ったい気持ちになって自然と顔が緩む。私がニヤニヤしていると、隣から舌打ちが聞こえてきた。けれど、今の私にはまったく気にならなかった。

2 なんでもいいよ

私の中で来栖が『いけ好かない同僚』から『まあ普通の同僚』に格上げになって、一か月。ある時、たまたま小野田と飲む日に、隣の席の来栖にも声をかけてみたことがあった。てっきり断られるかと思っていたのに、彼はあっさりついてきた。

それ以来、週に一度、三人で飲むことが習慣になっている。

騒がしい居酒屋のカウンターで、今日も三人横に並ぶ。私と来栖に挟まれた小野田は、しょんぼりと背中を丸めていた。小野田は優しい性格なのだが、それゆえにか、彼女の苑子ちゃんを怒らせてしまったらしい。

「公一くんってなんでもいいよばかり！ って急にキレられちゃって」

半分程空けたビールジョッキを両手で掴み、小野田は泣き言を零す。

「何食べたいって聞いても、いっつもそれだって。でも俺は、本当になんでもいいんだよ」

「なんでもいいって言っといて、後で文句言ったりとかは？」

「俺、そんなこと言うように見える？」

確かに。小野田は言わなさそうだが。苑子ちゃんの出したのなら、喜んで食べる姿しか想像できない。

「見えないねえ。来栖ならともかく」

「そこでなんで俺を引き合いに出すんだ、お前は」

つい比較対象として来栖の名前を出したら、即座に言い返された。けど、私の口も間を置かずに応酬する。

「だってあなた、『なんでもいい』って口癖になってそうなんだもん。そのくせ、作ったら微妙な顔とかしそうだし」

「はあ!? こっちの希望を言ったら『それはちよっと』とか言って、結局自分の希望を通すのは女のほうだろ」

「当たり前でしょ!? 相手の食べたいものと自分の希望を出した上で、じゃあ何にしようかなって、あれこれ考えるのがいんじゃない!」

それが会話でしょ。コミュニケーションでしょ! どうしてこれがわからないかなあ!

徐々にヒートアップして声が大きくなる私に、来栖が男側の言い分をぶつけてくる。

「こっちは、無理やり脳内で即席ランキングつけさせられてんだよ。だったら最初から自分の食べたいものを言えばいいんだ。そのほうが男は楽なんだよ」

来栖の声は私程大きくないが、はっきりとした口調で早口に意見を並べ立てる。

なんだか、女子が会話でコミュニケーションを取ろうとすることそのものを否定された気がした。ここは黙ってはいられない、と私が言い返すより先に、小野田の突っ込みが割り込んでくる。

「お前らはなんで俺を挟んでヒートアップしてるんだよ」

呆れたような声に、言い返すのは私と来栖の両方だった。

「あなたの問題だからでしょ!」

「お前の問題だからだよ!」

元々は小野田の悩みが原因なのに、何を他人事ひとごとのように！ その思いは来栖も同じだったようで、二人の声が揃った。すると、小野田に仲がいいねと微笑まれ、二人揃って苦虫にがむしを嘔み潰したような顔になる。

些細なことでいちいち言い合いになるのが私と来栖。毎回板挟みになる小野田には悪いが、近頃はいいストレス発散になっていた。けれど大抵、飲み会の途中で来栖の携帯が着信を知らせる。

今夜も、また――

「菜穂？ ああ、今、同期で飲んでる」

着信音が鳴って、すぐにスマホを手にとった来栖はその場で二言三言会話を交わし、長くなりそうだと判断したのか席を立つ。店の外に出て行く背中を、小野田と二人で見送った。

「菜穂ちゃん、この頃ますます束縛激しくなった気がしない？」

「聞く限り、感情の起伏が激しいタイプみたいだなあ」

「菜穂ちゃんが、ねえ……」

好きな人相手には我儘わがままになるタイプなのだろうか。だけど、来栖はあれきり、菜穂ちゃんのことでは愚痴ぐちつてくることは一度もない。むしろ、その話にあまり触れられたくないようだった。

「大丈夫なのかな」

「自分で別れるなって言った手前、心配はしてんだ？」

「別れるな、とは言つてないよ。ちゃんと謝れつて言っただけ！ ……せっかく縁あつて付き合ってたんならさ、一時の感情で仲直りもできないまま別れるなんて悲しいじゃない」

頭に血が上のほった勢いで別れてしまうと、後から気持ちを残している側が辛くなる。

「え、つてか、別れそうなの？」

「どうだろうな――」

来栖と菜穂ちゃんは、二か月の壁を越え、現在四か月という最長記録を更新中なのだが。「元々、女の話を楽しそうにする奴じゃないからわからん」

飲み仲間になつてまだ日が浅い私と違い、入社当時から来栖と仲良くしていたらしい小野田も首を傾げている。程なくして戻つて来た来栖は、やっぱり嬉しそうだとか浮かれてるだとかの要素が見えない顔で、溜息をついた。

「帰りに菜穂んとこ寄ることになったから、もう少ししたら行くわ」

「そうなの？」

「本当に同期と飲んでるのか、他に女がいるんじゃないかってしつこい。ここにはオッサンしかないっていうのにな」

「オッサンって俺のことかよ！ 同い年だろうが！」
 オッサンと言われた小野田が憤慨しているのを、けらけら隣で笑っていたら、ぱちつと来栖と目が合った。そして、うん、と頷かれる。

「やっぱりオッサンしかいねえ」

その中に私も含まれてるだど!?

「オ、オッサン女子で悪かったわね！」

「女子とは言っていない」

女にすら認定していただけませんでした！

ムカつきながらも反論できなかったのは、その自覚は十分にあるから。

性格は案外キツイようだが外見はふんわり可愛らしい菜穂ちゃんと違い、私は女子として見た目を取り繕う努力を明らかに怠っている。

スーツはシンプルなパンツスーツが多いし、緩くなったパーマをかけ直すことなく、伸びた髪を後頭部で一つにまとめているだけだ。

そこでふと、こんな私を見れば、菜穂ちゃんも安心するのではないか、と思いつく。

「いっぺんここに菜穂ちゃん連れて来たら？ そしたら安心するんじゃない。オッサンしかないことですし？」

オッサン扱ひされたのを根に持った言い方になってしまったが、悪い提案ではないは

ずだ。

なのに、来栖はあからさまに顔を歪めた。

「は？ 無理だろ」

「なんでよ？ 別に毎回連れて来いって言うてるわけじゃないんだから」

一回連れて来たら安心するだろうって、ただそれだけのことなのに。

「こういう場に、彼女を連れて来るほうがしんどい。そういうタイプじゃないし、あいつ」

「えー、来たいって言うかもしれないじゃない」

「つつうか……お前、何気に菜穂の肩持つよな」

「えっ！」

ぎくっ、として、自分の頬が引き攣ったのがわかった。

いや、別に菜穂ちゃんの肩を持っているわけではない。ただ、古傷が痛むのだ。

私は女に冷たい男が苦手だ。だからつい、来栖に対しては喧嘩腰になってしまうのかもしれない。男と女の話となれば特に。

「別に。女側の意見として、思ったこと言ってるだけだよ？」

「ふーん？ まあいいけど」

「つてか、来栖がクール過ぎるのよ。好きだから付き合ってるんでしょ？」

上手く話を誤魔化したのだが、そこで来栖が首を傾げた。

「……わかんねーな、もう」

「えっ？」

「付き合ってくれって言われて……外見もタイプだし、感じも良かったからOKした」
「は？」

それって、別に好きでもなんでもないってことじゃない？

悪びれた様子のない言い方にカチンときて、来栖に向かって口を開こうとした。

だが、気配を察した来栖は、私が何か言う前にふいっと視線を逸らし、財布からお札を出して小野田に渡した。

「これ、飲み代」

「おー、適当に割っとくわ。広瀬は落ち着いて座れー」

小野田に腕を叩かれ宥められる。その隙に来栖はさっさと退散してしまった。

「ちよっ、今の、好きでもないのに付き合ってるってことだよな？」

「あー……広瀬はそういうとこ、意外と頭固いよな。けど、別に普通じゃないか？」

まさか、小野田までそんな風に言うなんて信じられなくて、啞然とする。固まった私を困ったように見て、諭すような口ぶりで話を続けた。

「告白した相手が偶然自分のことを想って、実は両思いでした……なんて確率そうそうないだろ。仕事仲間とか知り合いならまた別だけど、ほぼ接点ない相手だし」

「それはそうだけど……だったら断るべきだったんじゃない」

「だから頭固いんだって。そこからスタートすることもあるだろうって話だよ。自分が彼氏いない時に、そこそこタイプの男に告られたら迷うだろう？ 逆に自分が告白するほうだったら、ちよっとしても可能性あるなら、断られるよりチャンスが欲しいって思うだろ」

「そっ……それは、そうかもしれない、けど」

「来栖だって、最初はいつももうちょい優しくしてるよ。けど、女のほうがすぐにそれ以上を求めるようになるから、互いに不満が溜まって別れる。その繰り返し。元が女にべったりってタイプじゃないから余計なんだろうけどさ、だったら告白してきた女も来栖の何を見て好きだって言ってきたのか、って話だよ」

ここまで小野田が来栖の味方をするとは思わなかった。何か言い返そうと口を開くが、それより先に小野田が続ける。

「来栖の態度は褒められたものではないかもしれないけどさ、お互いさまだろ。結局のところ、惚れられた側が相手の望む程には好きになれなかった、ってだけの話だ」

返す言葉が見つからなかった。反論できるだけの材料が、私の経験の中にはない。むしろ……小野田の意見を裏付けるような記憶が脳裏に浮かび上がってくる。

そうか。

そういう、ものなのか。

特別酷いことを言われたわけじゃない。だけど、ガンツと強く頭を殴られたみたいない衝撃を受けた。

告白したら両思いだったなんて幸運は、そうそうない。

たとえ両思いになったとしても、想いの強さは同じじゃなくて、ただ「付き合っている」という事実があるだけ。……私はそれがわからなかったから、失敗したのかもしれない。

「おーい。広瀬？ どうしたー？」

「……別に。だったら菜穂ちゃん、可哀想だなんて思っただけ」

「恋愛なんてそんなもんだろ。上手うまくいくにしろいかないにしろ、どこかで誰かが泣くようにできてるんだよ」

——育やつてもいない『愛』を求めるな。

耳みみに蘇よみがえる低い声。とっくに忘れていたはずのその声に、なじられたような錯覚おちいに陥る。来栖の顔とかつての恋人の顔が重なって、胸の奥の古傷が痛んだ。

* * *

今から二年程前。私は恋をしていた。

私の進める企画の打ち合わせで何度か会った、商品開発部の二つ年上の人だ。落ち

着いた大人の雰囲気の彼にあこがれ、告白して付き合うことになった時は本当に嬉しかった。

けれど、その喜びはすぐに寂しさに変わった。

私は何の疑問も持たず、会いたいのに向こうも同じだと思ひ込んでいた。私が電話で話したいと思うように、向こうも話したいと思ってくれていると、当たり前みたいに考えていたのだ。

彼はあまり、恋愛に重きを置くタイプではなかったのに。

かつての私は、菜穂ちゃん程激しくはなかったけれど、電話に出てくれない彼に寂さを募もらせていた。そのうち、仕事の後は何をしているのか気になって仕方がなくなり、会ってくれない彼に不満を溜め込むようになっていった。

「仕事しづらくなるから、周りには内緒にしておこう」

彼にそう言われていたことが、余計に私を不安にした。

そんな溜まりに溜まった気持ちだが、全部表情に出していたのだろう。

「不満があるなら、もういい」

中々デートの日程が合わないことで私が膨れた時、いきなり告げられた一言。そのたった一言で私たちは終わった。

多分、彼にもそれまで蓄積させていた不満があったのだろうと、今ならわかる。

当時の私は、元カレにとっては面倒くさい存在でしかなかったのだろう。最初は違ったのかもしれないが、いつの間にか、そういう存在になってしまった。それなのに私は、好きな人と付き合えた事実には舞い上がるばかりで、彼との温度差に気づかなかった。気づかないまま不安になって、その言動で彼からの評価を下げてしまった。

小野田が言ったことは、きっとそういうこと。

もちろん、あの二人は私の過去の失恋など知らないだろうけど、もしも知ったら、面倒くさい女と思われるのだろうか。

そう考えたらなんとなく気が乗らなくなって、私は週一回の恒例の飲み会から足が遠ざかるようになってしまった。

* * *

その日も私は、デスクでダカダカダカとキーボードを叩いていた。

気持ちと裏腹に仕事はなんだか調子がよく、今なら上手く企画書がまとまりそうな気がする。私は、余計なことを考えず、ひたすら企画書作りに没頭していた。

右隣から、時折、物言いたげな視線が飛んでくるけれど、気づかないフリを貫く。

「……最近、付き合い悪いよな」

「あー、ごめん。ちょっと仕事がいい感じに集中できて」

つつうか、まさか来栖からこんな風に言ってくるとは驚きだ。ついこの間まで、挨拶と業務連絡しか交わしていなかったとは思えない。しかも仕事中の会話だけに驚きは二倍だ。

「そんだけか？」

「そうだけど？」

「……小野田が、気にしてた。あの日、俺が帰った後、なんの話してたんだ？」
どうやら、来栖が気にかけているのは、私ではなく小野田らしい。

多分、小野田は私が飲み会に行かない理由に見当がついているはずだ。でもその内容を、来栖には話していないようで、ほっとした。

「大した話はしてないよ。ちょっと見解の相違というか考え方の違いというか？ はあつたけど、でも別に、それが理由ってわけでもないし」

カタカタカタ、とキーボードを叩きつつ、目はまっすぐパソコン画面に向けたままそう言った。

「……今週の金曜は？」

「あー、わかんないかな」

「新人歓迎会」

「げ」

忘れてた。

この四月に入社した新人の歓迎会があるんだった。

「……すっかり忘れてた」

「ほんとに余裕ないのか」

ただ単に記憶から抜け落ちていただけなのだが、上手く誤解してもらえたらしい。付き合いの悪さをこぞとばかりに便乗させて、私はこくこく頷いた。

「歓迎会は参加してあるよ」

「小野田が言い過ぎたって気にしてたから、連絡入るかなんかしてやれよ」

「別に気にすることないのに。もっと言いたい放題の奴が隣にいるしねえ」

来栖を引き合いに出して冗談ほく誤魔化した。

「お互いさまだろ」

「そうだよ。だから小野田にも気にしないでって言っというて」

小野田は悪くない。

たまたま言われたことが、私の古傷に触れただけのことだ。

「次会った時にお前から言っやれよ」

今回は企画営業部の歓迎会だから、小野田は来ない。

キーボードを叩く手を止め……私はこっくりと、素直に頷いた。

「次は行くよ」

小野田や来栖と飲むのは好きだ。来栖と忌憚きたんなくものを言い合うのも嫌いじゃない。それを失うのは嫌だと思っただ。

ここ二年程人員の入れ替わりがなかった企画営業部だが、この四月から一人、若い男の子が配属され、無事研修期間を終えての歓迎会となった。

店は会社近くにある全国チェーンの居酒屋の奥座敷だ。このところ小野田と来栖とばかり飲んでいたが、別に女性社員と交流がないわけではない。私は部署で仲のいい女性数人と一緒に、テーブルの一番端を陣取った。

「結、まだ企画頑張っただって？」

そう言っ私にビールを注いでくれたのは、二年先輩の和田さん。今となつては企画営業部のお局ぼねさまだ。ありがたく、グラスを両手で持っ頂戴ちやうたいする。

この部署の女性社員は全体の半分くらいだが、どちらかというと市場調査や資料集めを中心とした仕事が多く、私みたいに中々通らない企画書をネチネチ作り続けている女性社員は少ない。

「頑張ってますよー、中々通らないですけどね」

「よく、くじけないもんだと感心するわ」

「特別この仕事が好きってわけでもないんですけど……やっぱり会議に通ると嬉しいので」

「私、まったく興味ないわけじゃないんですけど、企画書を見てもらうのが恥ずかしいというか怖いとか……人に見られるのって緊張しません？」

自信なさげな声でテーブルの向かいから聞いてきたのは、二つ年下の後輩だ。

確かに慣れるまでは緊張どころの話ではなかったな、と入社したての一年目の頃を思い出す。この期間に諦めてしまう人間が結構、多い。

「まあ……慣れ、かな」

「えー」

「こんな企画書いてきてアホか、みたいな目で見られるのも、そのうち慣れるから」

私だって涙も汗も散々流したし、顔が真っ赤になるような経験もたくさんした。一度の失敗でいちいちメンタルをやられてる時期は、とっくに通り過ぎてしまったただけだ。

まだ若い女子二人には理解し難いようで、眉尻を下げている。

「ええええ」

「クソ度胸があんのよ、この子は。だから、一目置かれんの」

「えー、なんですかそれ」

和田先輩の言葉に苦笑いを浮かべて、私はビールを呷あおった。

「男性社員から、こいつは諦めが悪いって思われてて」

「いやそれ、一目置かれてるって言います？」

どこにも一目置かれる要素がない。と、思っていたら。

「女子からは敵視されたり。特に最近、あんた来栖くんとよく飲みに行ってるでしょ？」

どうやら和田先輩は、この話をしたかったらしい。

何やら社内で、来栖のことを引き合いに出して私を悪く言う人間がいるらしい。

「二人でじゃないですよ、小野田も一緒だし」

敵視される要素などどこにあるというのか。

「それでも、一部の女子たちは気に入らんよ。まあ、その中心は戸川菜穂だけだ」

「え……」

驚いて、ツマミに伸ばしかけていた箸はしが止まる。すると向かいの二人が、憤慨した様子で声を上げた。

「そうですよ、実際言ってるのは戸川さんの周囲の人間だけど、それを言わせてるのは彼女に決まっています」

「え、言ってるって何を？」

「……広瀬さんが、来栖さんを誘惑してるって」

「……ゆ？」

誘惑って。

あの赤ちょうちんが揺れるオッサン居酒屋で？

あまりに突拍子もない話に呆気にとられていると、より辛辣な言葉が和田先輩の口から飛び出した。

「仕事に行き詰まって結婚に逃げたいオバサンが、人の男に色目使ってむかつくって吹聴しまくってるよ」

「おは……」

大きな衝撃を受けて、私の手から箸がころんと転がり落ちた。

「私たちはそんなこと全然思ってますんからね！」

「え、同じ二十代なのに、私オバサンって言われるの？」

来栖と小野田にはオッサン扱いされ、若い子たちにはオバサン扱い……

さすがに女子として、なんか色々まずい気がする。

「さすがに枯れ過ぎ？ 女子力ってどうすれば身につく？」

「広瀬さん、論点がズレてます」

そうじゃなくって！ と向かいの後輩たちがヤキモキする中、私の隣に座る和田先輩

はゲラゲラ笑っていた。

「笑いごとじゃないですよ、後三年もすれば同じ年になるのに、よくもそこまで人を馬鹿にできますよね。若いつてすごいな」

「その時には、私もあんたも更に上だからよ。自分を基準にしか人を見てないんでしょ」

「もー、二人とも年の話から離れてくださいって！ そうじゃなくて戸川さんには気をつけたほうがいいってことです。そのうち、今以上にあることないこと言われますよ」

気をつけたほうがいい、と言われても、誘惑なんて身に覚えのないことを言われているのだから、どうしようもない。それに、ここ数回は飲み会をキャンセルしてたつてに……

でも、それくらい戸川さんも不安なのかもしれない。

飲んでいる時、来栖は彼女からの電話には必ず応対していたけれど、いつもあまり嬉しそうな顔をしていなかった。他人事とはいえ、どうしても気になってしまう。上手くいつているようには、とても見えないのだ。

相手を問い詰めたり、自分の気持ちを押し付けたりするのは逆効果だ……と、過去の痛い経験からつい心配をしてしまった時だった。

座敷の襖が開く音がして、自然とそちらに目がいく。

「こんばんはあ。ここで飲んでるって聞いて、ちよっと覗きに来ちゃいました」

件の戸川菜穂が、笑顔で入ってきた。

「え……」

私たちは、驚いて顔を見合わせる。

だが、男性陣は歓迎ムードで彼女を迎え入れた。

「おー！ 戸川さん。彼氏に会いに来たの？」

「いえ、私も友達と近くで飲んでて。せっかくだし、ちょっとだけ顔を出してみようかなって」

そう言って肩を竦める姿は実に可愛らしい。申し訳なさそうに周囲にぺこぺこ頭を下げつつ、それでもしつかり座敷の中を来栖の席に向かって進んでいく。それを見た後輩が、テール越しに私と和田先輩へ顔を寄せた。

「わー……普通、他部署の飲み会に乗り込んで来ます？」

「……あんたのこと牽制しに来たんじゃない」

「え、いや……えー？」

マジで？
そんなことしたら絶対逆効果だ。来栖を見ると案の定、これ以上なくらいに不機嫌な顔をしていた。いや、不機嫌なんてものじゃない。こんなに陰しい表情は見たことがない。

「お前、何しに来たんだよ」

「だって、ほんとに近くで飲んでたんだもん。だからちよつとだけ顔を見に来たの……」

「だったらもういいだろ、帰れ」

強い拒絶の言葉にびくつと、怯えた顔を見せた彼女に、一瞬気まずそうにしながらも来栖は言葉を撤回しようとはしない。そこへ周囲の男性陣からフォローが入った。

「おいおい来栖、照れんなって！」

「戸川さんも来栖の隣に座って。なんか飲む？」

「あ、いえ！ 私はほんとに」

「どうせ飲み放だし。もし怒られたら来栖が出すって。なー！」

そう励まされて、いそいそと彼女は来栖の隣に座る。来栖もこれ以上波風を立てては、周囲に迷惑をかけると考えたのだろう、何も言わなかった。

「来栖さん、ちよつと怖いですね」

「いやでもあれは、来栖くん悪くないでしょ。違う部署の飲み会に彼氏がいるからって来る？」

来栖の不機嫌っぷりに、さっきは戸川さんを非難していた後輩の一人が少々同情的になった。しかし和田先輩ともう一人の後輩は容赦ない。

「周りの男の人が情けないです。あんな風にご機嫌取っちゃって」

「あれは、飲み会の空気を悪くしないための気遣いでしょ。……戸川さん、勢い込んで来た割にびびっちゃってるしね」

和田先輩が言ったとおり、戸川さんはどこかおどおどとして見えた。不機嫌さを隠さない来栖の表情を窺って、小さくなっている。あの日、ミーティングルームで来栖を引つづいた人とは思えない。戸川さんがビールを注いだり話しかけたりすればする程、来栖の顔から表情が消えていく。

心配のあまり、つい二人の様子をじっと見つめていたら、来栖とばちっと目が合った。な、何？

見てたのはこっちだけれど、数秒視線が動かなかった。それから来栖は、面倒くさそうに眉を寄せた後、ぶいっと戸川さんのほうを向いた。

何か、言いたそうだったけれど……来栖はそれきりこっちを見ることはなかったので、首を傾げつつ私も視線を戻す。

「まあ、あの二人のことはいいんじゃない。こっちはこっちで飲もう」

あんまり気にし過ぎるのも、向こうにとってはいい迷惑だろうし。

「でも、知らないところで陰口を叩かれてるなんて腹が立ちません？」

「まあでも、実際に見たらわかるでしょ。私と来栖の間に同僚以上の感情はないって」それに、私が何か反応すれば、余計に相手を刺激しそうだ。知らないフリでいるのが

無難だろう。

「それよりさ、今考えてる企画のことで——」

やや強引に仕事の話を持ち出し、来栖と戸川さんの話は終わらせることにした。

座敷内は各自勝手に盛り上がり、少々ビールを飲み過ぎた私はトイレに立った。

「広瀬さんっ」

トイレを出てすぐのところで声をかけられ、驚いた。

「戸川さん？」

戸川さんが、にこにこ私に向かって笑っている。

「あ、お手洗ですか？ どうぞ」

道を塞いでいた私は、少し身体を斜めにして彼女に道を開けた。だけどトイレに用はないらしい。

「広瀬さんとお話ししたくて」

……なぜに。

笑うしかなく、首を傾げていると、彼女がぺこっと勢いよく頭を下げた。

「先日はすみませんでした！ 恥ずかしいところをお見せしちゃって」

それは間違いなく、ミーティングルームでのあの出来事のことだろう。

「ああ、いや。別に?」

戸惑いながらも気にしてないと手を横に振ると、彼女は本当に申し訳なさそうに肩を竦めて小さくなった。

「ほんとにごめんさい、感じ悪かったですよね、私」

「大丈夫よ、全然。彼氏がクールだと色々心配になっちゃうよねえ」

「そうなんですよお! あの日だって、せっかく和真さんの誕生日を一緒について思ってたのに、忘れてたなんて……」

「え、あなたの誕生日じゃなくて?」

「違います! 和真さんの誕生日です!」

私はてっきり戸川さんの誕生日を忘れたのかと思ってたよ。だとしたら、来栖は自分の誕生日をすぽんと忘れて仕事を入れちゃっただけで、平手打ちされたってこと?!

いや、でも彼女はお祝いしたくて色々準備してたのかもしれない。うん。きつとそうだ。

「あんまり、和真さんが冷たくて……もしかしたら他に女の人がいるんじゃないかとか、疑っちゃって」

「あー、不安になるよね。うん」

うるつ、と目を潤ませた彼女を見ると、なんだか気の毒になってつい同調してしまう。「ありがとうございます、広瀬さん優しい……」

「いや、そんなことないけど。でも、来栖くん、なんだかんだでいい奴だし、そんな二股とかするタイプじゃないと思うよ」

むしろ面倒くさくしてしないタイプだろう……というのは、心の内にしまっておいた。

「勇気を出して謝りに来てよかったです。これから、色々相談に乗ってもらえますか?」
「ええっ!」

「お願いします、和真さんと親しい同僚で女の人って広瀬さんしか思い浮かばなくて……最近、同期会とかでよく一緒に飲んでますよね?」

「あー、うんまあ。あ、小野田も一緒にね。商品開発部の」

両手をぎゅつと胸の前で組み、目を潤ませて詰め寄られる。けども、来栖の性格を考えると、これはきつとまずい気がする。

絶対嫌がりそう、と思っていたら……

「菜穂。何やってる?」

眉を蹙めた来栖が、座敷からこちらへ歩いて来るのが見えた。私をちらっと見た後、その目が戸川さんに向かう。

「もう帰れと言っただろう」

「ちよつと、この間のことを謝っただけよ。すぐ帰るから」

どうやら来栖に促されて帰るところだったようだ。戸川さんは拗ねた声で答えたもの

の、中々その場から動こうとしない。その様子に来栖が溜息をつく。

「帰りに寄るから」

「ほんとに？　じゃあ待ってる」

それでようやく納得したのか、彼女はちよつと嬉しそうに笑った。

「すみません広瀬さん、お先に失礼します」

「あ、はいはい。お疲れさま」

笑顔で手を振る彼女を見送って、背中が見えなくなったところで、また溜息が聞こえた。

「はは。お疲れ。またけんかになるのかとヒヤヒヤしちゃった」

「あー……最近は、そうでもない。あれから一回話して、あっちも感情的にならないようにしてる。俺も」

「そうなの？」

意外だった。余程私が驚いた顔をしていたのか、来栖はむすつとした顔で言った。

「……いい大人がろくに話し合いもせず感情的になって別れるのはよくないって、お前が言ったんだろ。そのとおりだと思ったから」

ますます驚きだった。まさか私がした忠告を、聞き入れてくれるとは思わなかった。ぽかんと来栖を見上げていると、仏頂面ぶつちやうづらで睨にらまれる。

「忘れてたんだろ」

「いや！　違うよ、覚えてるけどびくりしたの！　てつきり適当てつきりに聞き流されているものだと」

でも、もしそれで二人の距離が近づくなら、小野田が言っていたようにスタート地点が違っても恋に繋がる希望が持てる。だけど、なんだろう……

来栖の横顔を見ると、やはりどこか冷めていて。

「……それでも、どうにもならないものってあるよな、やっぱ」

「え？」

「温度差って、お前は言ったけど、意識してどうにかなるものでもないんだよ」

知らず、きゅ、と胸が苦しくなった。

どんなに足掻あがいてもどうにもならない、人の気持ち。

それを責めることはできないのだと、第三者の目で見ればよくわかる。

何も言わない私に来栖が言った。

「そう言ったら、お前は怒るかと思った」

「……どうにもならないものなんでしょ？」

きつともう、来栖の中では答えが出ているのかもしれない。なら、外野がとやかく言うことではないだろう。座敷に戻ろうとして、後から追ってきた来栖に尋ねられた。

「さっき、菜穂になんか言われたのか」

立ち読みサンプル はここまで